

ゆふ

# 「木綿の山」

（大分・由布岳）

「木綿の山」は今の由布岳を指す。由布岳（標高一、五八三・五メートル）は大分県中部にある温泉地として有名な由布市湯布院町と東に隣接する別府市の境にそびえ、古くは木綿山、柚富の峯と呼ばれ、東峰と西峰と二つの峰からなり、その端麗な容姿から豊後富士とも呼ばれ親しまれている。奈良時代に作成された豊後国風土記には「この村には栲の樹が多くあって、いつも、その皮をとって木綿をつくるので柚富の郷という。」とある。なお、「栲の樹」は「楮の樹」の古名である。西日本の山地に自生し繊維作物として各地で栽培。樹皮は和紙の原料。

・また、柚富の峯については「柚富の郷は、この峰に近し。因りて峰の名と為す」とある。柚富の郷は由布岳南西の麓。標高500mにある盆地で現在の大分県由布市湯布院町のことである。由布岳を主峰とした山々に囲まれた東西12km、南北8kmの高原性の盆地である。

・万葉時代の湯布院は大分から九州を統治する拠点であった大宰府に至る古代の官道の重要な宿駅でもあった。万葉集巻七の「羈旅にして作る歌九十首」の中に大宰府に向かう旅人が旅の途中で、木綿の山（現・由布岳）を見つめながら詠ったと思われる次の一首がある。

きとめ

はな

ゆふ

# 娘が 放りの髪を 木綿の

くも

# 山 雲なたなびき 家のあた

み

# り見む

卷七―1244 作者 未詳

(解説)

おとめらの振り分け髪をゆふ(結う)の山に雲よたなびかないでくれるな妻のいる家のあたりが見たいから。という旅立ちの人の歌。家に残してきた妻への深い思いが偲ばれる。

・「放りの髪」とは当時の女子は、八歳〜十五・六歳ごろまで頭髪を伸ばるにまかせて二つのこぶをつくり、そこから分けて垂らした。おさげ髪のこと。うない髪ともいう。

この万葉が詠われた地である湯布院へはJR、高速バス、あるいはマイカー等で高速道を使っていく方法がある。

・博多からはJR九州が運行する観光特急列車「ゆふいんの森」に乗ると約2時間余りで「JR由布院駅」に到着する。

駅の待合室には駅には珍しい小さなアートギャラリーがあり風景写真、絵画等が展示されており、モダンな駅舎が観光客を迎えてくれる。

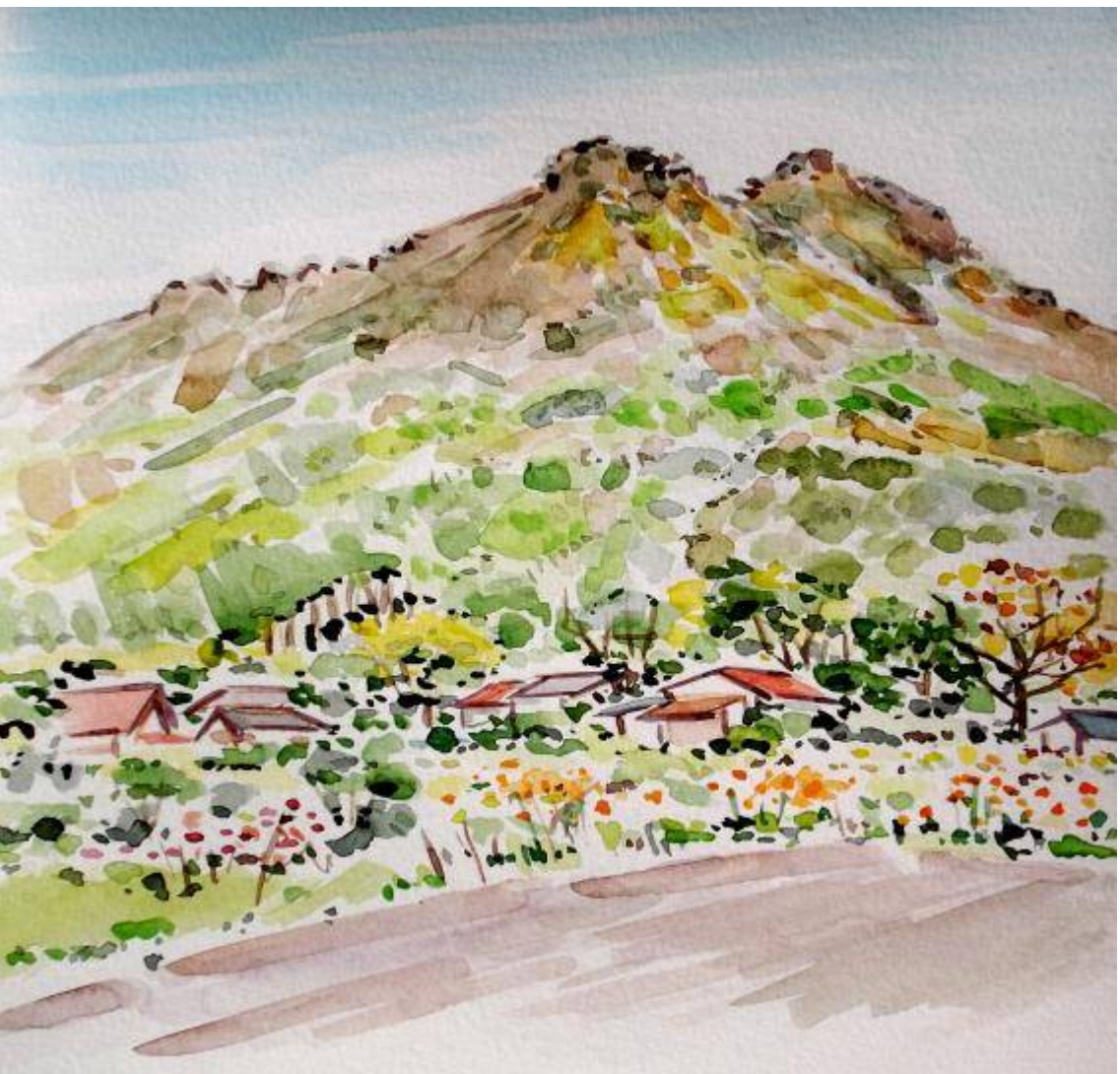
- ・ 駅舎を一步外にできると商店街が軒を連らねているが、その商店街の奥に秀麗な容姿の由布岳が目の中に飛び込んで来て驚き、感動する。
- ・ また、観光客に人気のある由布岳の山麓に広がる湯の里「湯布院」を観光客を乗せて走る辻馬車の風景が古里の香りを濃く残している。



(写生地)

JR九州「由布院駅」前から少し離れた場所から雲が一つもかかっているく東西の二峰がくつきりと二つのこぶをつくり、この万葉で「放りの髪」と詠われている娘さんの「おさげ髪」のイメージでぐっと迫ってくる「由布岳」を描く。(池田杏花)

・「由布岳」―右の峰が東峰



（参考文献）・佐々木均太郎著「豊路・万葉を訪ねて」・角川日本地名辞典「大分県」

・「万葉集」・日本古典大系」等